

新米教師1年目の振り返り

平取養護学校静内ペテカリの園分校
教諭 伊藤 淑芳

教師になり、一年が過ぎた。期限付き教諭として働いて学校から、現在の学校に赴任し、始めは同じ知的障害を主とする学校でもこんなに違うものかと、驚かされることがたくさんあった。自分としては、期限付き教諭として働いていたときと採用された今とで、児童生徒に向き合う気持ちは変わらないつもりだが、教師一年目として感じたこと、学ぶことができたことを以下に示す。

1. 子どもたちの成長を数年間見守ることができる幸せ

これまで、自分が子どもたちと関わることができる時間は、一年という限られた時間でのことだった。もちろん、担当した子どもたちを次の年も見守ることができるという保証はないが、何年か継続して子どもたちの成長を見守ることができるということ、責任をもてるということに、喜びを感じた。責任を果たすことができるよう、教師として必要な知識を取り入れるべく、学び続ける必要があると実感している。

2. 判断することの難しさ

現在、自分が行っている子どもたちへの指導に、授業づくりに対し、振り返り、向上をはかっていくための判断をしていくことの難しさを感じた。「周りの教師がやっているから良い」ではなく、子どもの実態に合っているか、その時間に何をねらい、何をさせるべきかを、しっかりとした根拠の下に行うことができるようになりたいと感じている。

3. 具体的な目標の設定

一年間で意識して取り組んだことが、目標を具体的に設定し、授業に臨むことである。目標をより具体的にすることで、活動における子どものねらうべき姿が明確になり、より充実した手立てをとることが可能になると考える。そして、授業での改善点が明確になる。まだまだ、目標設定への課題はあるが、子どもにとって二度と同じ時間は返ってこないということを忘れず、一時間に全力を注ぎたい。

今回挙げたことだけではなく、一年間で、子どもと信頼関係を築くことの大切さ、子どもの興味関心に基づく授業の工夫、言葉掛けや身体支援の工夫などたくさんのことを学ぶことができた。自分を支えてくれている、先輩の教師、同期の仲間に感謝したい。そして、新米教師として一年間を過ごすことができたのは、師範塾でお世話になった先生方、仲間たちの力があってこそそのものだということを忘れず、学び続ける教師として頑張りたい。